≪資　料≫

ソ連の反宗教教育活動方針

S. D. スカースキン編
井尻良夫訳

序

宗教の克服を可能にする決定的条件は，個性の全面的発達をその主要な目的とする，共産主義建設の過程そのものである。

不断の，急速な生産力の発展を基礎とする，ソ連人民の物質的生活水準の向上，ソ連社会構成員全体の文化的水準の向上，精神的欲求を満足させるための物質的諸条件の創造——教育文化施設網の拡大強化——これらすべてが，宗教観念の決定的克服，人間意識からの宗教思想の排除をもたらすことは，必然である。しかし，ソ連共産党中央委員会の諸決議のなかで繰り返し強調されている如く，宗教の克服は，自然発生的に行われるものではない。宗教思想・観念を人間意識から排除することは，合目的的な反宗教宣伝の進行のなかでのみ達成される。このためには，すべてのソ連人民に唯物論思想をうえつけることを目的とした，反宗教教育の一層の完成が，必要である。

反宗教活動を成功させるための前提条件の一つは，各信者グループに対する具体的・個別的アプローチ，各グループの特殊性の考慮である。このことは，とりもなおさず，各地方・各社会グループにおける宗教性の実態調査，信者の類型的研究などを必要とする。

宗教性の実態

各社会グループのなかにおける信者の割合は，一様でない。労働の性格・条件，生産関係の性格・条件が，人間の世界観形成に与える影響は著しいものがある。

したがって，大企業の幹部労働者のなかでは，信者の割合が比較的低い。白ロシヤ住民の宗教性に関する実態調査によれば，信者のなかで労働者の占める割合は，19.5%である。

計画性と労働者の自覚的規律とを伴う，生産の社会主義的性格そのものが，労働者を反宗教的精神で教育することを可能にしている。また，工場・企業が，政治的・文化的教育の主要な中心であることは，当然である。信者の割合は，小規模企業・生活サービス部門などの方が高い。農村地区では，信者の大多数が，農業労働に従事している人々である。例えば，オレンブルグ地方では，農村地区におけるロシヤ正教団体・グループの数は，1962年の統計によれば，都市地区の16倍に達している。

このことは，歴史的に構築された諸状況によって説明され得る。革命前，農村は，数百万の零細経営から成り立ち，その圧倒的多数が，原始的技術を所有しているにすぎなかった。農民は，種々の圧制，貧困，蒙昧によって，打ちひしがれていた。農民は，労働者階級よりかなり遅れて，経営・生活全般における社会主義的改革に着手した。

経済・文化・日常生活の各分野に残存している農村的後進性は，農村地区住民のなかで宗教的偏見が蘇生することを，助長する。

インテリゲンチャ出身の信者は，大して多くない。このことは，教育・教養の水準が比較的高いことによって，説明され得る。また，同時に，インテリゲンチャ出身信者の特徴は，布教の積極性と宗教思想の主張・擁護における高度の柔軟性とである。

現在は社会的生産活動に従事していない信者（年金受給者，家事専従者，被扶養者）も，特別のグループにまとめることができる。このような人々は，信者のなかでかなり大きな割合を占めている。1959年の調査によれば，タンボフ地方のバプテスト派団体のなかでは，社会的生産活動に従事している者が，平均で全体の30パーセントを占め，残りの，圧倒的多数の者は，何らの労働にも従事していなかった。

ソ連では，信者の圧倒的多数が女性である。女性のロシヤ正教徒は，全体の約75～80パーセントを占めている。このような状況は，ソ連の他宗派団体にも当てはまる。このことは，多くの場合，革命以前にロシヤ女性がおかれていた

不平等状態の結末が，未だに完全には清算されていないことによって，説明され得る。

ソ連各地における調査によれば，信者の約70パーセント以上は，40歳以上の人々である。重要なことは，50歳以上の信者の意識が，帝政ロシヤ時代，または，ソビエト政権初期に形成されたという事実である。これらの人々の多くは，小学校教育しかうけていないか，または，教育を全くうけていないかのどちらかである。残念なことには，現在でも，信者のなかに若者が含まれている場合があるが，これらの若者の両親は，言うまでもなく，信者である。

信仰の原因調査にとって大きな意義を持っているのは，住民の教育文化水準と信仰との相関関係を分析することである。ソ連各地で実施された，具体的な社会学的調査によれば，宗教的遺物が教育水準の極めて低い社会的階層・グループのなかで普及していることは，明白である。

社会主義的発展の途を，他の地方よりも遅れてたどっているリトワニヤ，ラトビヤ，エストニヤ，モルダビヤ，西ウクライナ，西白ロシヤにおいて，宗教的遺物の影響が比較的強く感じられることは，充分な根拠があり，納得の行くところである。ファシストドイツ軍によるソ連西部の占領も，また，宗教地理に本質的影響を与えた。戦争の時期にファシストドイツ軍によって占領されていた地方では，住民の宗教性が，ソ連の他の地方と比較して，かなり高いことは事実である。

人間の宗教性は，宗教的観念・感情の存在，宗教的儀式の挙行を特徴としている。

各種の調査によれば，これらの特徴のすべてが，必ずしも明確に表現されていない場合もある。なかでも最も根強い，頑固な特徴は，宗教の実践的・礼拝的側面，すなわち，日常生活・社会的要求とからみあった宗教的儀式—出産，結婚，葬式—の挙行であるように思われる。宗教的儀式の挙行は，多くの人々にとって，彼らを心理的・倫理的に魅きつける家庭的伝統への表敬にすぎない。社会心理学は，日常的意識の領域のなかで，比較的固定的・保守的な要素と比較的流動的な要素とを区別する。前者に所属するものは，特に，若干の固定的・紋切型的人間行為—習慣，風習，伝統—の心理的側面である。

信者の宗教意識のなかで最も保守的な要素は，彼らの固定的・紋切型的行

為，彼らによる宗教的儀式の定期的挙行と深く関連している。これらの心理状態は，極めて固定的であり，信者の宗教的観念が極めて曖昧模糊としている場合でも，彼らを宗教団体のなかに押し止めておくことができる。したがって，ソ連では，宗教性が伝統的宗教儀式の挙行面にのみ現れるような信者が少なくないのは，驚くべきことではない。このような信者には，強固な宗教的信念が欠けている場合が多い。しかしながら，それでも，多くの信者は，宗教的儀式を定期的に挙行し，宗教的祝祭日を祝っている。

相異なる宗教を信仰している人々に対しては，相異なるアプローチが必要であることを，忘れてはならない。同じ形式・方法の反宗教宣伝を型通り模倣することは，このような場合，害毒をもたらすだけである。例えば，イスラム教・ユダヤ教の信者には，ある宗教的儀式・伝統を自己の民族的属性としてみなそうとする性格がある限り，イスラム教・ユダヤ教の影響下にある人々のなかで反宗教宣伝を実施する場合には，擬似民族的感情に反対し，健全な民族的伝統を擁護するための闘争と，民族的属性であるかの如く考えられている宗教的伝統（断食，祝祭，割礼など）の反動的側面の究明とを有機的に結合させなければならない。

他宗派の信者に対して反宗教教育活動を実施する場合にも，彼らに適した，具体的アプローチが必要である。

種々の事実から判断すれば，信者のなかに，宗教の理論的問題に対して関心を失いつつある傾向がみられる。この傾向が最も著しい問題は，聖書の説明に基づく自然観であり，次に著しいのは，霊魂・来世についての観念であるように思われる。

達成されつつある社会的変革と巨大な科学的成果の影響をうけて，最近，信者は，古い宗教的儀礼への帰依，神についての伝統的観念からますます解放されつつあり，また，大衆の宗教意識のなかで，個性としての神の観念は，捕捉しがたい，普遍的な霊魂としての神の観念によって取ってかわられつつある。

信者の宗教意識に変化と衰退をもたらしている要因のなかで，ソ連の経済的・政治的現実の巨大な変化以外に，大きな役割を果たしているのは，ソ連人民の普通教育水準の向上，宗教的臆測をくつがえす科学技術の成果，科学知識の広範な普及などである。正に，これらの要因の影響をうけて，多くの信者が，

原始的宗教観念を拒否するようになっている。

種々の信者タイプ・信仰レベルについて科学的に解明することは，反宗教教育活動にとって，大きな意義を持っている。信者タイプの問題を科学的に解明するためには，信者を宗教意識の特徴によりグループ別に分類することが，前提である。ソ連の科学的反宗教文献のなかで，宗教的要素に対する信者の態度によって，さらに正確に言えば，宗教的世界観・礼拝の如何なる側面が信者を最も強く魅きつけているかによって，信者を分類する種々の試みがなされている。

ソ連の宗教研究者の大多数は，信者を四つの基本的タイプに分類すべきであるという点において，一致している。信者を各グループに分類するためには，単一の規準—宗教への帰依の度合，信仰度—が使われる。

第一のグループに所属する信者の特徴は，神の存在に対する確信と宗教儀式の無条件的挙行とである。これらの信者は，当然，周囲の人々に対して，自己の信仰を積極的に宣伝する。このような信者は，少数であるが，時に宗教界のなかで大きな役割を果たし，宗教団体のなかで積極的に活動する。

第二のグループに所属する信者の特徴は，神・来世の存在を無条件的に容認するが，狂信者とちがい，無神論者・他宗派信者に対して我慢づよく接することである。これらの信者は，自己の信仰を主張するために，特に積極的には活動しない。また，彼らは，自己の信仰を擁護するために，周到に準備された議論を構えることもない。彼らは，主として，宗教的伝統の連続性，道徳宗教的教訓について言及するにすぎない。

第三のグループに所属する信者の特徴は，彼らの宗教的見解が不安定で，絶えず動揺していることである。これらの信者のなかには，意識的に真理を求め，宗教に批判的分折を加へ，宗教教義に疑念を懐いているが，これらの疑念から積極的に自己を解放しようと努力しない人々が，含まれている。

宗教と無神論との間を彷徨う信者の数は，少なくない。大抵の場合に，これらの信者は，神を無条件的に容認しながら，ある自然現象・社会現象を解釈する場合には，しばしば自然弁証法的立場に立っている。言いかえれば，彼らは，宗教よりは無神論に近い立場に立って，判断する場合がある。ただ，一般教養・普通教育の不足，その他の一連の要因が，彼らをして宗教的遺物から決

定的に解放されることを，妨げている。

さらに，もう一つのグループを指摘しなければならない。このグループに所属する信者は，自ら信者であると名のり，教会を訪れ，勤行・礼拝を励行するが，現実には，神も悪魔も信じていない。このような人々は，数は少ないが，各宗派の聖職者・信者，特に，積極的信者のなかにもいる。

以上のような区別と混交とを充分に考慮することが，反宗教宣伝の正しい組織化にとって，大きな意義を持っている。

反宗教教育

宗教的偏見を克服する場合に，大きな役割を果たすのは，反宗教教育である。宗教性の克服を促進する客観的要因が，如何に完全に作用するか，宗教的遺物の維持，時には蘇生を助長する社会的・情緒心理的要因を，如何に規制できるかは，反宗教教育の規模・内容に深く関わっている。

V・I・レーニンは，「大衆に関心をおこさせ，大衆を宗教から覚醒させ，大衆を最も多様な側面から，最も多様な手段によって高揚させるために，大衆に最も多様な方法で近づき，大衆に最も多様な生活分野から収集した事実を知らせ，反宗教宣伝に関する最も多様な資料を……」与えることが必要であると，主張した。（V・I・レーニン全集第45巻P26）

これらの指示にしたがって，ソ連共産党は，科学的無神論宣伝の組織化に関する整然たる活動を実施してきたし，現在も実施している。この活動は，共産主義教育の主要な一部分である。

反宗教教育体系は，宗教との闘争のなかで，大衆・個人に思想的影響を与える全手段・方法を広範に活用することを，前提にしている。ソ連では，多くの社会団体が，反宗教宣伝に従事している：全ソ連団体≪知識≫，地方反宗教学校，反宗教講師集団，反宗教博物館など。反宗教教育のためには，住民の全階層・グループを包括し，彼らの職業的，年令的，民族的特徴を勘案した，均整のとれた反宗教宣伝体系の創造が，必要である。また，同様に，宗教の地理的分布の特徴についても忘れてはならない。

反宗教活動は，全国的に，たとえ教会も宗教団体も存在しないような地方でも，実施されなければならない。それは，このような地方でも，当然，家庭の

なかで宗教的儀式を挙行している信者が住んでいるし，また，他方，宗教団体は，神を信じない人々，動揺している人々のなかでも，活動をつづけているからである。

反宗教宣伝は，宗教的遺物の克服を目的としている限り，信者と対決するものであってはならない。逆に，反宗教宣伝は，信者に宗教的教訓の偽瞞と害毒を自覚させ，科学知識の正当性を確認させ，人間存在の真義を教えると同時に，見せかけの宗教的価値に現実的価値を対比させなければならない。言いかえれば，ソ連の反宗教活動の誘因と動力は，先づ第一に，信者と彼らの精神的解放とについての，本質において人道的な配慮である。

反宗教宣伝の攻撃性は，信者・聖職者の宗教的信念を嘲笑することでは断じてない。信者・聖職者に対する侮辱的敵対行為は許されず，その上，このような敵対行為は，宗教的偏見の蘇生を促進し，宗教的狂信をあおり立てるだけである。宗教との闘争—これは，信者との闘争ではなく，非科学的思想・宗教的イデオロギーとの闘争である。反宗教宣伝の使命は，ソ連人民を分裂させることではなく，共通の創造的事業のなかで彼らを結束させることである。

科学的世界観は，普通教育・特殊教育の全体系（小・中学校，技術職業学校，高等専門学校，大学）によって育成され，現実に，ソ連人民全体に徹底している。近代的な科学的思考方法を知ること，技術的知識の基礎を修得すること，自然科学・歴史の研究に際して自然現象・社会現象を唯物論的に解明する原理を身につけること，社会主義的共同体の規律と共産主義の道徳的原則とを養うこと—これらすべては，無神論を自覚的に会得するための根幹をなすものである。

人間は，空虚な心をいだいて生活することができない。人間には，最高の原理と人生の目的とが必要である。この必要性は，時に，醜い，歪んだ形をとり，宗教にはけ口を求める。道徳的理想の問題，行為と責任の問題，人生の意義の問題，人間と社会の問題などは，現在，布教者が，最も関心を寄せているものである。したがって，唯物論的立場から宗教の道徳的価値の正体を暴露し，宗教的理想の≪むなしさ≫・≪くだらなさ≫を教えることが，反宗教教育にとって重要である。さらに，人間を宗教的奴隷状態から解放するための闘争のなかで，人間を崇高な共産主義的理想によって武装し，人生における真の目

的の発見，社会に役立つ人間への成長を援助することも，また，宗教教育にとって重要である。

如何なる方法で信者にアプローチすべきか—このことは，直接的，または，間接的に反宗教宣伝に従事し，信者に働きかけ，信者を指導する立場にあるすべての人々が，解決を追られている課題である。宗教的偏見との思想的闘争のなかで，最近，信者に対する個別的な働きかけに，ますますウェートがおかれるようになってきた。これは，決して偶然のことではない。宗教の根強さは，人間の感情・精神的体験・私生活と大いに関連がある。多くの信者の宗教性は，一般的な事由よりは，むしろ，特殊な，極めて個人的な事由によって，説明され得る。したがって，各信者に対して個別的にアプローチすることが，必要である。

信者に対する個別的な働きかけは，先づ第一に，信者のために闘争すること，すなわち，偏見・後進性・迷信に反対し，理性・善を擁護するために闘争することを前提にしている。この場合，≪ささいな≫形式の口頭宣伝—心のこもった対話，率直な話し合い，辛抱強い説明—の重要性を無視することはできない。反宗教宣伝活動家には，生き生きした，的確な表現を用いて信者にアプローチする才覚・技能が要求される。しかも，信者の信頼・尊敬を得ることは，信者の関心事・心理を知る時にのみ，可能である。信者の人間性を誹謗することなしに，信者と議論することが，大切である。信者との対話は，対等者同士の対話であり，信者を理解度・教養度において劣等な存在であるかの如く取扱うような，横柄な態度は，決して許されない。また，集団の力こそが，宗教的偏見を克服するための，最も有効な手段である。集団の特徴は信頼・配慮・同志的相互援助である。集団は，教会側へなびきかけている人々に警告を与え，宗教に慰安を求めている人々にその誤りを悟らせ，心をまどわされている人々に援助の手をさしのべる能力を持っている。

残念ながら，ソ連には，教育活動が軽視され，社会生活における積極性が低く，同僚の一部に仕事に対する非良心的態度がみられても，何らの不安も感じないような生産集団が，未だに，存在している。しかるに，これらの生産集団の指導者は，生産計画の遂行にのみ注意をはらい，教育問題を無視しつづけている。このような集団の状況は，一部の労働者の持っている否定的な道徳的側

面を助長するとともに，宗的的偏見をも力づけるものである。

生産集団と直接には結びつかない生活をおくっている人々に対する働きかけは，一層複雑である。ソ連には，専業主婦，家内工業労働者，年金受給者などがいて，自己の，狭い範囲の関心事にのみ没頭している場合がある。彼らのなかには，宗教感情をいだいている人々，各宗派の活動家などが最も多く含まれている。したがって，住宅委員会などにおいて，居住地区に対する反宗教活動を組織することが，極めて重要である。このことは，ソ連共産党組織の主要任務である。

青少年に対する反宗教教育の重要性を過大評価することは，困難である。ソ連の青少年は，反宗教精神で教育され，宗教的信仰を圧倒的に拒否している。しかしながら，青少年に対する反宗教教育の状態は，未だに，全く順調であるとは言えない。

自分たちが無神論者であるが故に，息子や娘も自分たちを見習って，自動的に無神論者になるものと確信し，子供の反宗教教育に関心を示さない両親もいる。また，家庭のなかで宗教儀式を挙行することに協調的な大人もいる。大人は，子供のより良き未来のために，科学的世界観を積極的に宣伝すべき義務があり，宗教的現象・迷信などに対して無関心であってはならない。

家庭と学校との連帯こそが，青少年に対する反宗教教育成功の秘訣である。学校は，青少年に知識を与えるだけではなく，科学的唯物論的・無神論的世界観の基礎を教育する場所である。多くの教師は，授業のなかで，担当科目教材を活用して，自然界・人間社会の最も重要な現象を説明し，現実世界についての唯物論的観念の正当性を実証する近代科学技術の成果を教え，不屈の無神論者を育成している。しかしながら，現在8年制中等学校で教えられている教科書・カリキュラムでは，当然，反宗教教育の要請を考慮することができない。もし社会学コースの導入によって，高学年における反宗教学習が，体系的性格を持つようになれば，8年制中等学校の諸条件のなかでも，主として過去に教会が果たした宗教的役割の特徴に関する，限られた量の断片的事実を生徒に与えることが可能になるだろう。したがって，直ちに，8年制中等学校教育の反宗教的傾向，特に，自然科学科目の反宗教的傾向を強化し，教科書・カリキュラムに適切な改正を加えるべきである。

生徒に対する反宗教教育のなかで，大きな役割を果たすのは，多様な形式の課外活動，校外活動—青少年無神論者コーナー・クラブの組織化，対話・夜間集会・遠足・映画演劇鑑賞の実施—である。また，子供たちのなかで宗教的遺物との闘争を展開する場合，大きな任務をになうのは，ピオネール団体である。子供たちの生活を深い内容で充実させるために，ピオネール団体は，子供たちに対して明朗な，情操的な形式の働きかけを行い，感動的な伝統的行事を創造すべきである。

共産主義建設の進行，労働を生活要求にまで高揚させる過程のなかで，技術の革新につれて，勤労者の労働時間が短縮され，自由時間が大いに拡大されるだろう。余暇・自由時間が，文化財の習得，知識の蓄積，高度に発達した共産主義社会の生活に欠くべからざる自己鍛錬などのために，人間にとって必要なものであることは，明白である。

如何なる方法で余暇を活用すべきか，如何なる目的のために自由時間を消化すべきか—これらの問題は，決して取るに足らぬものではなく，反宗教教育の組織化に直接の関係を持っている。勤労者の余暇・文化的サービスなどの賢明な，合理的な組織化は，宗教的遺物の普及にとって有効な障害となり得る。

実践の示すところによれば，宗教儀式を批判し，その本質を暴露するだけでは，不充分である。これとならんで，宗教的礼拝に，市民的儀礼・式典・祝祭日を対比させることが，必要である。最近，ソ連では，この方向に向かって，種々の試みがなされている。多くの共和国において，特に，バルト三国（リトワニヤ，ラトビヤ，エストニヤ）においては，新しい儀式を創造する場合，古い民族的伝統のなかから若干の要素が巧みに活用され，民族文化の特徴・特性が取り入れられている。しかしながら，すべての古い民族的伝統・習慣を現代的なものに移しかえることは，正しくないだろう。それは，古い民族的伝統・習慣の多くが，ソビエト体制に無縁の道徳を肯定し，民族主義・女性蔑視を涵養するものだからである。したがって，古い伝統・習慣を活用するためには，それらの社会的本質・傾向を深く解明することが，大切である。このことに関連して，指摘しなければならないのは，新しい市民的儀式を創造する場合，ソ連の芸術インテリゲンチャの代表者たちに，権威ある発言をする権利が与えられているということである。それは，新しい祝祭日・儀式などの深い情緒倫理

的内容が，芸術インテリゲンチャに大きく依存しているからである。

科学的反宗教宣伝の主要な形式は，文化宮殿・クラブにおける講演会・テーマ別夜間集会・問答の夕べなどである。多くの都市と農村では，クラブのなかで，講演コンサートのような形式の反宗教宣伝が行われている。また，ある地方では，反宗教講演旅行が民俗博物館によって主催され，大成功を収めている。講演による宣伝の長所は，その大衆性と，科学技術の最新資料及び生活の生々しい事実，特に，最も有効なローカル的事実を活用できる可能性とである。それは，講演の説得力・浸透力が，その具体性に大きく依存しているからである。

反宗教宣伝における芸術・文化の役割を過大評価することは，困難である。芸術・文化一般について言及する場合，特に指摘しなければならない重要な事柄がある：すなわち，芸術・文化とは，人間の美的感性を形成し，宗教の最も頑強な隠れ家になっている情緒・感覚・感情の領域において，人間が宗教的幻想から解放されることを援助するものでなければならない。

勤労者に対する反宗教教育において，出版物・ラジオ・映画・演劇・テレビなどの思想的マスメディアは，特別の地位を占めている。反宗教的テーマに関するラジオ放送は，ソ連の津々浦々で数千万の人々によって聴取されている。映画は，現実生活を認識するための強力な手段である。映画スタジオは，多くの立派な科学啓蒙宣伝映画を製作し，無神論宣伝に計り知れない貢献をしている。しかし，残念ながら，これらの思想的マスメディアは決して充分には活用されていない。

反宗教出版物は，年毎にテーマが拡大され，発行部数も増大している。ソ連では，特別な反宗教宣伝月刊誌≪科学と宗教≫が出版されている。この雑誌は，反宗教宣伝活動家に大きな援助を与えている。この雑誌のなかでは，残存する宗教的遺物を具体的に解明した豊富な試み，信者に対する種々の集団的・個人的働きかけの組織化などについて語られている。この雑誌は，科学的無神論の宣伝活動家にとって良きアドバイザーになっている。

科学的世界観の形成は，大衆を反宗教的に教育することなしに，すなわち，宗教とのイデオロギー的闘争を遂行することなしに，不可能である。この闘争の方法と手段は，多種多様である。科学的反宗教宣伝は，科学的・体系的に実

施される場合にのみ，成功を収めることができるだろう。

参 考 文 献

АНДРИАНОВ Н., ПАВЛЮК В., ЛОПАТКИН Р.: Особенности современного религиозного сознания. МОСКВА, 1968.

ДУЛУМАН Е., ЛОБОВИК Б., ТАНЧЕР В.: Современный верующий. МОСКВА, 1970.

КРЯНЕВ Ю.: Противоположность христианской идеологии и научного коммунизма. МОСКВА, 1961.

ФИЛИППОВ Л.: Коммунизм и религия. МОСКВА, 1964.

〔訳者あとがき〕

この資料は，1971年に，モスクワにあるソ連国立政治出版所（ИЗЛАТЕЛЬСТВО ПОЛИТИЧЕСКОЙ ЛИТЕРАТУРЫ）から出版された，アカデミー会員 S. D. スカースキン責任編集「反宗教宣伝活動家必携」（НАСТОЛЬНАЯ КНИГА АТЕИСТА под общей редакцией академика С. Д. СКАЗКИНА）の最終章（P448—P455）—『ソ連の反宗教教育活動方針』（ПУТИ ПРЕОДОЛЕНИЯ РЕЛИГИИ)—を訳したものである。

この出版物は，ソ連の政治・経済・社会・科学・文化・教育の各分野において，≪反宗教宣伝活動家用指導書≫としての役割を果たしている。その意味で，この出版物は，極めて重要な，公的性格の著しい文献である。

ソ連は，1977年10月7日に新憲法を公布し，高度に発達した社会主義的全人民国家の門出を国の内外に宣言した。ソ連共産党書記長兼ソ連最高会議幹部会議長（国家元首）L．I．ブレジネフは，1977年11月2日に，ソ連革命60周年を記念するために開催されたソ連共産党中央委員会・ソ連最高会議・ロシヤ共和国最高会議合同会議において，「10月革命勝利のための闘争は，新しい同盟者を獲得するために，戦術の交代も，妥協も充分あり得ることを，教えた。しかし，また，それは，我々に別のことを教えた：すなわち，我々は，如何なる場合にも，戦術のために原則を曲げてはならない」と，演説した。（[イズベチヤ] ≪ИЗВЕСТИЯ≫ ソ連最高会議機関紙 1977年11月3日号）このように，「共産主義運動の多様化」とか，「雪融け」とか叫ばれ出してからかなりの年月

を経たが，ソ連の内外政策の根源は不変であるとみてよい。

ソ連新憲法は，ソ連人民の市民的権利を大幅に拡大したと喧伝されているが，「信教の自由」に関する限り，新憲法の第52条は，1936年制定の前憲法（第124条）に比して，内容的に全く変わっていない。新憲法第52条によれば，，「ソ連市民には，任意の宗教を信奉する権利及び信奉しない権利，宗教儀式挙行の権利及び反宗教宣伝の権利が保証される。信仰に関連して，敵意と憎悪の念をおこさしめることは許されない。」

近年，ソ連指導部は，とみに内外の宗教家たちとの交流を促進し，日本の宗教家たちにも訪ソの機会を与えている。しかし，ソ連における反宗教活動の実態を見聞することが許されていない今日，ここに訳出した一章は，ソ連の反宗教運動について簡潔に述べた，数少ない資料の一つとして役立つだろう。